



## 「山岳気象遭難の真実

—過去と未来を繋いで  
遭難事故をなくす—

大矢康裕 著,  
吉野 純 監

山と溪谷社, 2021年9月  
254頁, 1,100円(税込)  
ISBN 978-4-635-51075-2

本書は、登山愛好家向けの「ヤマケイ新書」の1冊である。著者は、デンソー（トヨタ系自動車部品メーカー）山岳部に所属する気象予報士。自らの経験を活かしながら、さまざまな山岳気象遭難の実体を解析する。取り上げた気象は、爆弾低気圧、豪雨、落雷、異常高温、低体温症（夏山の低温、濡れ、風）、台風、豪雪である。それぞれのテーマで、第1章～第7章が構成される。各章は、統一したスタイルをもつ。すなわち、

- ①テーマになる気象の一般的説明。この部分は、登山愛好家向けの「気象学入門」的な書き方になっている
- ②具体的な遭難の事例の紹介。この部分は、事故報告書を基に、悲劇を生んだ登山ルートを詳しく紹介する。同時に、著者の独自の解析を基にして、遭難をもたらした気象を具体的に解説する
- ③「どうすれば遭難を防ぐことができたのか」というタイトルで、著者が、独自の遭難回避の方法を提案する。これは、著者が登山家でなければならない提案である
- ④「将来の気候変動によって〇〇(=遭難の原因になった気象)はどうなるのか」というタイトルの下に、シミュレーションによる予測を、グローバルな視点から紹介する。本書の副題に「過去と未来を繋いで」とあるのは、この部分を指している。

登山家+気象予報士という著者のスタンスが、本書を特徴付けている。遭難は、常にローカルである。遭

難した場所の特殊事情が、遭難を導く。一方、原因となる気象は、遭難の現場よりも、はるかにスケールが大きい。本書は、ローカルな視点と地球規模のスケールを等分に見渡しながら、現象を解析している。遭難の記述では、登山家としての著者の個人的な遭難体験が語られ、臨場感を感じさせる。JRA-55を利用した著者による総観場の解析等に基づき、遭難の原因となった気象が解説されている。そこには、著者の気象予報士ならではの技術が活かされている。

2009年のトムラウシ山の遭難は記憶に新しい。7月14日から2日の予定で登山ツアーが企画され、男性5名、女性10名が参加した。ガイドは3名である。2日目から雨が降り始めたが、登山を続行した。次第に悪天になり、疲労と低体温症で8名が亡くなった。強風と低温は、北海道付近で発達した低気圧によってもたらされた。著者は、MSMのデータを利用して、山頂付近の強風を解析している。

実は、この遭難から7年前の2002年7月、トムラウシ山で女性2名の登山者が遭難している。やはり低体温症で亡くなっている。原因は、北上した台風6号である。同じ山で、同じような遭難が繰り返されるのは悲しい。登山の前に、過去の遭難事例を学習しておけば、2度目の遭難は避けられたのではないか。

第5章では、1913年8月の箕輪尋常高等小学校の集団登山で発生した遭難(11名死亡)が取り上げられる。気象の解説で1913年(大正2年)の天気図が引用されている。当時の天気予報と現在の天気予報の隔世の違いを感じさせて、興味深い。

山中では、登山家は、無防備のまま極端気象に晒される。都会であれば何でも無い気象でも、山中では命を落とすこともある。それ故、登山家にとって、気象の知識が命を守る手段となる。本書は、将来、登山する人の遭難回避に、大いに役立つに違いない。

(元放送大学 木村龍治)